

結結プロジェクト 第4回車座交流会 in 南三陸町&大崎市 報告書

人のネットワークはお金に代えられない。

外と町のつながりを継続させるのは、観光振興だ。

——— 南三陸町産業振興課 商工業観光振興係 主査 宮川舞
東北から、新しい社会の仕組みをつくりたい。南三陸を、価値や思想の生まれる地に。

——— 宮城大学・南三陸復興ステーション 山内明美
被災地が一日も早く「復興地」になり、ここで輝く女性が生まれることを目指していく。

——— 一ノ蔵 マーケティング室長 山田好恵
風評被害の悔しさ。それでも、今年も田んぼに水を張ろうと思っている。

——— 大崎市農家 斉藤肇
私達に必要なのは、批判でも、評論でもない。ただ行動あるのみ。

——— 認定NPO法人JKSK代表 木全ミツ
東北から、日本の未来をつくっていこう。

——— (社) ロハス・ビジネス・アライアンス共同代表 大和田順子

【日時】 2012年10月19日～20日

【開催地】 宮城県南三陸町・大崎市

【参加者】 南三陸町・大崎市を中心に復興に取り組む現地リーダー 37人
首都圏からの参加者・専門家 28人 計65人

【主催】 認定NPO法人女子教育奨励会 【共催】大崎市 【協力】南三陸町

【日程】

10月19日

11時	くりこま高原駅集合
12時 半	南三陸さんさん商店街にて合流 (南三陸リーダーの山内正文さん、宮川舞さん のお話を聞く)
14時 半	志津川市街地の視察 (被災地、福幸きりこの視察) 熊田・ふゆみずたんぼの視察 (NPO田んぼ岩渕理事長による解説) 入谷・YES 工房見学
18時	被災地のリーダーからの報告・意見交換会

10月20日

7時	朝食
10時	酒蔵「一ノ蔵」見学 (高橋直樹さん、斉藤肇さんによるふゆみずた んぼプレゼンテーション)
11時	安心市場「さくらっこ」見学・買い物
12時	昼食 (蕪栗沼ミニレクチャー)
13時	車座ワークショップ
16時	マガンのねぐら入り見学



※今回のツアーは平成23年度総務省・緑の分権改革・被災地復興モデル調査事業の一環として開催されました。

※車座交流会については、学校法人早稲田大学と株式会社ブリヂストンが連携して設置した研究プロジェクト「W-BRIDGE」の平成24年度の研究助成を受け実施しました。



東北の女性リーダーと首都圏の女性エキスパートの連携によって震災復興を目指そうと発足した「結結プロジェクト」。2011年5月の発足から定期的開催している車座(交流会)は、今回で4回目を迎えた。復興に向けて前進する中、東北が抱える課題を解決し、具体的な支援プロジェクトを創生していくことが、今回も大きなテーマとなった。

【初日】

宮城県・JR くりこま高原駅に集合した首都圏メンバーはバスに乗り、今年2月に再開を果たした仮設市場「南三陸さんさん商店街」で現地リーダーと合流した。昼食には、地元の実産物をふんだんに使った「南三陸キラキラ秋旨丼」を堪能。港町の食の魅力があふれる名物丼は、食から町の元気を取り戻そうと、市場のオープンに合わせて復活した。その背景には、風評被害に苦しむ漁業関係者と行政、地域の綿密な連携があったと聞く。

昼食後、商店街で鮮魚店を営む山内正文さんに、震災時の様子やその後の状況を伺った。代々南三陸町で商業を続けてきた山内さんは、津波の恐怖が身近にあることを常に意識し、日ごろから避難経路をシミュレーションしていたという。自然と隣り合わせて暮らす人の心構えと迅速な対応に、思わず全員が感心の声を上げた。また全国の商店街で形成する「防災朝市ネットワーク」の話からは、日ごろのネットワークの大切さや、コミュニティの核としての“商人の力”が感じられた。



その後、南三陸町観光振興課の宮川舞さんの案内で、志津川地区を回る。海沿いの同エリアは津波で浸水し、人が住める状態になっていない。西に見える山の土を削り、新たに地盤を形成するにはまだまだ時間がかかるそうだ。建物の解体が進み、所々にコンクリートが山になって積まれていた。かつてここには商店が立ち並び、沢山の人の暮らしがあった。何もなくなった広大な敷地が、今もなお津波の破壊力を物語っている。



商店街の跡地に、切り絵が施された白いパネルがいくつも立てられている。これは「きりこ」と呼ばれる、南三陸町に古くから伝わる正月飾りの一種。ここで暮らした人々と街の記憶を残すため、アートプロデューサーの吉川由美さんが企画、商店街の人々や多くのボランティアとともに作り上げた。パネルに彫られたメッセージには、それぞれの店主の記憶と、街への想いが込められている。



その後、一行は熊田へと移動、ふゆみずたんぼを視察しながら、「NPOたんぼ」の岩淵成紀さんにお話を伺った。通常、稲作時には追肥をするが、ふゆみずたんぼの場合、冬場に飛来する水鳥や、たんぼに住む多様な生物の力を借りて、肥料や農薬を一切使わずに高品質・高収量を実現している。岩淵さんは、古くから津波が水田にもたらす「恵み」がたんぼを元気にしてきた事を紹介しながら、「何百年という歴史の中で変わらない農法こそが、最も持続可能な農法」と強く語った。

続いて、クラフト制作の「Yes工房」を訪問、南三陸復興タコの会の大森さんに工房を案内していただいた。廃校になった校舎に名前を由来するこのアトリエ（廃校房）では、南三陸のマスコットの真っ赤なタコを、復興キャラクターとして売り出している。地元の間伐材を使った個性的な商品の数々。かつて養蚕で栄えた入谷の繭を使った繭細工も、人気がある。商品は地元住民がひとつずつ手作りしており、地域の雇用を生み出している。



1日目の視察を終え、宿泊地の「ホテル観洋」へ。志津川湾を一望するこのリゾートホテルにも客足が戻りつつあり、現在満室に近い状態が続いているという。

18時、夕食をとりながら、現地で復興活動が続けるリーダー達から活動の報告をリレー形式で受けた。「再生可能エネルギーによる循環型コミュニティの実現(山内明美さん)」「本業のバッグづくりを通して、南三陸町の文化、経済の発展に貢献する(加賀美由加里さん)」「高齢者が活き活きと暮らせる“老好社会”づくり(井上利枝さん)」「日本の消費行動を変革させるマーケティングの実践(山田好恵さん)」「福島をオーガニックコットンの産地に育てる(吉田恵美子さん)」「若者が先頭に立った、町民参加の未来の森作り(松島宏佑さん)」など、個性を活かした、力強い取り組みの数々。一方で、地域が抱える課題や、今も消えない被災者の心の傷が浮き彫りになった。プロジェクトの進展やそれぞれの想いを共有する中で、また新しいつながりが生まれ、お互いが新鮮な刺激を感じたようだ。



【2日目午前】



ホテルで朝食を済ませ、バスで大崎市へと移動。宮城県を代表する酒蔵、一ノ蔵酒造を視察した。伝統的な製法にこだわった酒造り続ける一方、斬新で魅力的な商品を生み出すマーケティングが特徴の同社は、震災後に純米生原酒「未来へつなぐバトン」を発売。売上金の全額が被災した子どもたちの支援に使われるという素晴らしい企画で、即座に完売したそうだ。



工場見学に引き続き、大崎市産業政策課の高橋直樹さんと、大崎市でふゆみずたんぼ米を作っている農家の齋藤肇さんに、大崎の農業の現状についてお話を伺った。高齢化、後継者不足、米価の下落による生産量の減少など、厳しい環境に置かれた宮城の農業。この現状を打開するために、地域をコーディネートする外部の協力者の必要性を高橋さんは指摘した。また農家の齋藤さんの、風評被害に苦しみながらも地道に米作りを続けていこうとする姿に、大きな拍手が送られた。

【午後:車座】

加護坊山・四季彩館での昼食は、ふゆみずたんぼ米と地元の食材を使った加護坊定食をいただいた。



昼食後は車座。前夜の活動報告で明らかになった、東北が抱える課題や展開中のプロジェクトについて、6つのテーマでディスカッションを行った。各テーマ数人ずつのグループに分かれ、より多くの知見・アイデアが活かされるよう、前半・後半でメンバーを交代。熱く活発な議論が行われた。

テーマⅠ 南三陸町:地域づくりの主体をどう創っていくか

テーマⅡ 大崎市ふゆみずたんぼ:共感者を増やすには、南三陸町との連携強化

テーマⅢ 亘理グリーンベルトプロジェクト:南三陸、他地域との連携

テーマⅣ いわきオーガニックコットンプロジェクト:他地域への拡大

テーマⅤ 現地の今を伝え続けるメディア活用

テーマⅥ 地エネ(地域の自然エネルギー):市民による地エネ導入、関心層を増やすには



ワークショップ後は各グループの議論を共有。震災復興、再生という視点から一歩踏み出し、東北から新しい社会の仕組みを、ひいては新しい日本をつくっていかうとする夢のあるアイデア・意見が挙げられた。

- 地域づくりは人づくり。地域を愛し、夢と思いやりの心を持つ人々の行動によって、地域がつくられていく
- リーダーの資質は「未来が見えている人」「実行できる人」
- 震災前からの魅力に加え、防災教育、被災体験など南三陸町ならではの体験を活かし、今までになかった新しい魅力のある地域をつくっていく
- ふゆみずたんぼのコンセプト、文化的な面をブランド化につなげ、生産者が儲かる仕組みをつくっていく
- 「命を大切に社会を東北から」そのシンボルとして、ふゆみずたんぼを広めたい
- 企業から活動資金を募るには、出資のメリットを感じてもらえるようなプロジェクトにしていくべき
- オーガニックと慣行栽培の違いを、一般の人々が良さを実感できるように伝えていくことが必要
- 事業性を高めるには、高い品質とデザイン性の確保、マーケティング戦略が不可欠
- 福島のそれぞれの地域とつながることで、コトンパイブを、福島を代表するキャラクターに育てていく
- 情報発信の主体を高校生に任せてはどうか。地域のサッカークラブなどは良い主体になるのでは
- 「被災地」に代わるネーミングを考え、復興・再生とは違う角度から情報発信できないか
- 地域の現状、本当に重要な情報が、まだまだ伝えられていない
- 福島では、地域の状況を考えると「脱原発」を高らかに主張できない難しさがある
- まず自分たちの取り組みに覚悟を決めた上で、正しい情報を提供し、地元の賛同者を集めていく

夕方、最後のイベント会場へ。蕪栗ぬまっクラブの戸島潤さん、伊藤のぞみさんの案内で、蕪栗沼にてマガンのねぐら入りを見学した。マガンは天然記念物の渡り鳥で、越冬のためにシベリアから飛来する。辺りが暗くなりはじめると、えさ場の田んぼからマガンが飛び立ち、隊列を組んで沼へと移動するのが「ねぐら入り」だ。約6万



羽が、綺麗なV字を描いて飛んでいく姿は圧巻であった。稲をついばむマガンは「害鳥」とも言われていたが、2002年より蕪栗沼の周辺水田をふゆみずたんぼ(冬期湛水)にし、農薬や化学肥料を使わない農業を導入することで生息地

の環境を整備するなど生きもの共生農業に取組み、2005年にはラムサール条約湿地に認定され、マガンと地域の人々の良好な関係が築かれている。

今回のツアーでは、未来に向かって力強く歩みを進める東北の人々の姿と、自然が本来持つ深い魅力を再発見できたのではないだろうか。東北が、新しい社会モデルが生まれる先進地となっていくことを期待しながら、参加者それぞれの想いを胸に、全てのプログラムが終了した。

